

陳旧性足関節外側靭帯損傷に対する鏡視下 Broström 変法の有用性 ～前進法との治療成績比較～

○松井 智裕 (まつい ともひろ)(MD)¹⁾, 熊井 司 (MD)²⁾, 東山 一郎 (MD)³⁾,
田中 康仁 (MD)⁴⁾, 間瀬 泰克 (MD)⁵⁾

¹⁾ 阪奈中央病院 整形外科

²⁾ 奈良県立医科大学 スポーツ医学講座

³⁾ 松倉病院 整形外科

⁴⁾ 奈良県立医科大学 整形外科

⁵⁾ 八王子スポーツ整形外科

【目的】

陳旧性足関節外側靭帯損傷に対する初回手術として、われわれは遺残靭帯を利用した前進法を施行してきた。しかし近年、ArthroBroström 法の報告を散見するようになり、われわれも 2012 年から鏡視下 Broström 変法を行っている。今回、鏡視下 Broström 変法の短期術後成績を従来の前進法と比較検討したので報告する。

【方法】

前進法は 2004 年から 2012 年に手術を施行した 48 例 49 足であり、術後経過観察は平均 56 週であった。一方、鏡視下 Broström 変法は 2012 年から 2013 年に手術を施行した 9 例 9 足であり、術後経過観察は平均 19 週であった。それぞれの症例において、術前後の JSSF scale, ストレス Xp を比較検討した。

【結果】

前進法群の JSSF scale は術前 73.1 から術後 94.1 に改善し、同様に内がえし Xp は 13.3° から 4.7°, 前方引出し Xp は 6.7mm から 3.5mm に改善した。一方、鏡視下 Broström 変法群の JSSF scale は術前 64.2 から術後 89.4 に改善し、同様に内がえし Xp は 16° から 4°, 前方引出し Xp は 8.6mm から 4.5mm に改善した。

【考察】

鏡視下 Broström 変法は、再建靭帯周囲組織の良好な修復能を維持することができる。また、関節内病変の処置を同時に行えることも大きな利点である。ただし、本研究では症例数も少なく、術後長期成績も不明であることから、今後さらなる調査を要すると考える。

【結論】

短期術後成績ではあるが、鏡視下 Broström 変法は従来の前進法と比較して遜色のない術後成績であり、有用な方法と考えられる。